万葉歌人の足跡

万葉歌人の中には有名な人物もいますが、官位の低い歌人の場合は、その足取りを追うことは困難です。ところが、木簡などの史料から、足跡が判明する人物もいます。大伴千室もその一人です。

かくのみし　恋ひや渡らむ　秋津野に　たなびく雲の　過ぐとは無しに
（大伴千室　巻四―六九三）

本歌は、吉野の秋津野を詠んだ歌だと思われますが、題詞に吉野に行った際の歌とは書かれていないため、紀伊の秋津野の可能性もあると指摘されています。この歌を詠んだ千室は、『万葉集』巻二十―四二九八番歌の左注に「左兵衛督」とあり、天平勝宝六年（七五四）の役職が知られるのみの人物でした。しかし、平城京の二条大路に掘られた穴から、彼の名と思しき文字を記した木簡が二点、出土しました。

吉野の山々

□伴宿祢千室
□□千室
（ともにSD五一〇〇出土）

これらの木簡が出土した地点は、光明皇后の宮に近く、同じ地区からは皇后宮職に関わる木簡群が大量に出土しました。中でも、皇后宮の警備に携わる兵衛や中衛に関わる木簡が多く見つかっています。

また、千室の木簡が出土した穴からは、天平八年の芳野（吉野）行幸に関わる木簡も出土しています。この穴から出土した木簡群は、天平七～八年のものが中心を占め、千室の木簡もその頃のものである可能性があります。

天皇や皇后の行幸啓には、兵衛らが警護をすることになっていました。高位でない官人の嫡子で、中等と判断された人物は兵衛になる決まりもあります。後に左兵衛督になった千室が、それ以前にも兵衛の任にあった可能性もなくはないでしょう。こうしたことから、千室が天平八年の芳野行幸に付き随い、六九三番歌を詠んだと考えたくなりますが…断定できる材料がなく、これ以上のことは分かりません。

最後の最後で判断を保留しましたが、このように、木簡などの断片的な史料からでも、万葉歌の背景に少しずつ迫ることができつつあります。

（万葉文化館研究員・吉原啓）